

自分というものをよく知ろう

・・・文理選択をにらんで考えよう

文理選択に向けて

進路HR

5月上旬から、文理選択に向けて進路部からのガイダンスを聞き、下旬には進路HRを実施しました。ガイダンスと適性検査をもとに、「自分はどんなことで社会貢献できるか」から考えればいいこと、職業と学部・学科が結びついていること、さらにその学部・学科に進むために重点的に学ぶべき教科があることを分かってもらえたと思います。さらに6月10日の土曜セミナーでも、進路学習のつづきをやりました。これらのことが分かった上で文理選択をできることが大切ですので、7月の登録提出までまだまだやれることはいっぱいあります。どんどん進路学習を続けてください。中には卒業後の進路なんてまだ考えにくいという人もいるかもしれませんが、しかし、それでも進路について検討することは重要です。なぜなら、第一に、高校生活の早い時期に進路について考え、目標を立てた人の方が、納得した進路選択ができ、また合格する確率も高くなる傾向があるからです。第二に、様々な推薦入試の出願条件となる「学習成績の状況」の値は、1年生から3年生までの成績の平均になりますので、3年生になってからチャレンジしようと思っても、遡って成績を上げることはできないからです。

そして文理選択を考えるにあたって、**自分はどんなことに興味を持っているのか、どんなことに向いているのかを把握できていること**、すなわち「自己を見つめる」ことも大きなポイントとなります。

自己というものをよく知ろう

自己を評価する・自己を知るポイントは右の絵のようにいろいろあります。言葉にしても「責任感がある」「物覚えがよい」「体力には自信がある」「礼儀正しい」「みんなをまとめる力がある」「物事に集中できる」「細かいところに気が付く」「誰とでも気軽に接することができる」など、あげればきりがありません。点数で評価される「学力」はそのうちの1つにすぎません。しかし学力は重要です。入試などを見ても分かるように、短期間で人間を判断しようとする、どうしても点数化しやすい部分を優先して評価せざるを得ないからです。そのことは押さえながらも、自分の中に潜んでいる、点数で評価できないようないろいろな力・可能性をどんどん発掘していきましょう。**人間はみな、何かにおいては人より優れているはずですし、また何かにおいては劣っているにちがいないのです。**

そして、もう1つ大切なことは、「人は自分そのものを自分の目で見ることはできない」ということです。すなわち、自分がどんな人間なのかを知りたければ、自分のまわりの人



の心の中に自分がどう写っているかを見るしかないということです。**まわりの人を大切に、自分が写っている「心」を見せてもらうことによってはじめて真の自分が浮かび上がってくるのです。**自分というものをよく知ったうえで文理選択できることは大切ですし、まわりの人からの忠告・指摘・助言は自分の「盲点の窓」（他人は知っているのに自分が知らない部分）を開けるのに大いにプラスになることだと思います。

定期考査を振り返ろう

初めての定期考査はどうでしたか。「学習法を学習する」のが高校1年生の目標ですから、点数がとれた、とれなかった以上に、学習法の軌道修正のために、定期考査を振り返ってほしいと思います。「もっと予習に力を入れないといけなかった」「小单元ごとに教科傍用問題集をやっておけばよかった」「眠いと頭に入らないので一度、朝型でやってみよう」など、きっと修正点が見つかるはずですよ。それを次、どう活かすかが一番大事です。そして、反省したこと、決意したことを「ポートフォリオ」に記録しておくといいのです。

結果が出なくてもあせるな

努力しているのに結果がでないことはよくあります。俗にスランプといいますが、スランプは努力している人しか体験できない貴重な一時期のことです。例えばジグソーパズルをやるとしましょう。最初は全体像がまったくつかめない、周囲ぐらいしか埋まらずなかなか進みません。でもがんばってやっているとそのうち全体像がつかめてきます。そうすれば「空」は「空」で集めよう、「家」は「家」で集めよう、「木」は「木」で集めようという作業をする気になり、いつの間にか空と家と木がつながって一枚の図柄となっていくという「はかどる段階」に突入します。断片的な知識でも、将来につながればすごい財産になります。例えば数学で絶対値がわからなくても、不等式がわかれば、将来、絶対値がわかり、つながる時期がきます。そう信じて分かる範囲を増やしていきましょう。

力は固定されるものではない

教科ごとに見れば、皆さんの学力にはばらつきがありますが、総合で見ると、結構ぎっしり詰まった分布すなわち、1点きざみで並んでいるような分布になることが多いです。ちょっとした努力が大きな飛躍に、ちょっとした油断が予想以上の大きな転落に結びつきます。さらに「クラス内順位」というものは、点数順に決まるため、例えばクラスみんなが頑張っていたらクラス内で40位であっても力を持っていることになり、みんなが怠っていたら、10位であっても力不足ということになってしまいます。あくまで「相対的な位置」を知る判断材料として理解し、それよりも自分として「何が足らなかったか」「何を伸ばさなければならないか」を的確にとらえて次回につなげてほしいと思います。ですから、現時点での差は、力があるなしの差より、定期試験に向けての「高校としての学習」に成功したか否かが大きな要因となっています。まさに「力は固定されるものではない」ということです。そして、社会が本当に求めているのは、高校の勉強内容の知識を持っている者ではなくて、高校の勉強というものから逃げずに向き合って力をつけた者、すなわち新たな課題を与えられても過去に力をつけた体験をもとに、また向き合っていける者です。